第2章　現状と課題

❶ 川崎市の特性

(1) 位置・地形

川崎市は神奈川県の北東部に位置し、北は多摩川を挟んで東京都に、南は横浜市にそれぞれ隣接し、西は多摩丘陵を控え、東は東京湾に臨んでいます。

市域は、多摩川の上流に向かって次々に拡大されたため、南東から北西へ延長約33㎞にわたる細長い地形となっています。また、北西部の一部丘陵地を除いて起伏が少なく、神奈川県下でも比較的平坦な地域です。

大都市（政令指定都市・東京都区部）間で比較すると、市域面積は144.35ｋ㎡と最も狭く、市街化区域面積割合は大阪市、東京都区部、名古屋市に次ぐ４位と高くなっています。

また、多摩川に沿って臨海部の重工業地域、住宅地、自然の残る丘陵地といった性格が異なる地域の結合によって都市が形成されているという特徴があります。

一方で川崎市は、首都圏の中心部に位置し、しかも東京と横浜という巨大消費地に隣接する経済活動等の視点からは極めて有利な地理的条件を備えており、交通ネットワークの点においても羽田空港との近接性や、複数の鉄道路線、東名高速道路など、非常に恵まれた環境にあります。スポーツにおいても、こうした立地優位性や交通の利便性、潜在的な集客力を活かし、市外の人を含めた集客増を図るためのイベント等を強化することが求められます。

(2) 人口

全国で人口が減少に転じる中、川崎市は人口増加を続けており、平成21年４月に140万人に到達しました。特に、最近５年間では、政令指定都市移行後40年の中でも最大の伸びを見せており、130万人に到達した平成16年からはわずか5年間で10万人が増加しました。

平成22年国勢調査結果によると、平成22年10月1日現在の川崎市の総人口は前回調査（平成17年）に比べ7.4％増加しました。人口増加率は平成17年の調査に引き続いて大都市中最も高く、大都市平均を大きく上回っており、大都市の中でも特に人口が急増している都市という特徴があります。

人口密度（1ｋ㎡当たり）を見ると、本市は9,875人であり、大都市平均の4,342人に比べて約2.27倍と非常に高く、東京都区部、大阪市に次いで３番目の高さです。年齢構成３区分の比率を見ると、川崎市は大都市中、平均年齢が最も低く、生産年齢人口（15～64歳）の割合が最も高いなど、比較的若い世代が多い大都市です。

また、人口当たりの出生率（人口当たりで生まれる子どもの数）や婚姻率も２０年近く大都市中１～２位で推移しており、現在の川崎市は「若いファミリーと子どもが多いまち」と言えます。こうした特性を活かし、若い世代や子どもを中心としてスポーツによる本市の活力向上を図ることが有効です。

市の特性

- ●非常に恵まれた地理的条件（立地優位性、交通利便性）
- ●人口急増中の大都市
- ●若いファミリーと子どもが多いまち

表1　大都市の人口増加率(H17年比)

都　市	増減数	増加率(%)
川崎市	98,501	7.4
東京都区部	456,042	5.4
福岡市	62,464	4.5
千葉市	37,430	4.0
さいたま市	46,120	3.9
横浜市	109,145	3.0
相模原市	15,924	2.3
名古屋市	48,832	2.2
仙台市	20,860	2.0
岡山市	13,412	1.9
札幌市	32,682	1.7
広島市	19,452	1.7
大阪市	36,503	1.4
堺市	11,000	1.3
神戸市	18,807	1.2
京都市	▲796	▲0.1
新潟市	▲1,946	▲0.2
浜松市	▲3,166	▲0.4
静岡市	▲7,126	▲1.0
北九州市	▲16,679	▲1.7

表2　大都市の人口密度

都　市	人/㎢
東京都区部	14,383
大阪市	11,981
川崎市	9,875
横浜市	8,480
名古屋市	6,935
さいたま市	5,621
堺市	5,613
福岡市	4,282
千葉市	3,535
神戸市	2,793
相模原市	2,182
北九州市	2,002
京都市	1,780
札幌市	1,707
仙台市	1,327
広島市	1,296
新潟市	1,118
岡山市	898
浜松市	514
静岡市	507

表3　大都市の平均年齢

都　市	平均年齢
北九州市	46.1
静岡市	45.9
新潟市	45.3
神戸市	45.0
大阪市	44.8
浜松市	44.7
京都市	44.6
札幌市	44.4
堺市	44.3
千葉市	44.0
東京都区部	43.9
名古屋市	43.8
岡山市	43.6
横浜市	43.4
広島市	43.1
さいたま市	42.8
相模原市	42.8
仙台市	42.3
福岡市	41.9
川崎市	41.5

（平成22年　国勢調査結果に基づく20大都市主要指標対照表）

❷ スポーツを取り巻く状況

本計画を策定するにあたり、平成22年度に「スポーツに関する市民アンケート」、「市内スポーツ団体調査」、「市内公共スポーツ施設調査」を実施しました。

これらの調査結果を踏まえ、スポーツを「する」「観る」「支える」、「スポーツを活用したまちづくり」の４つの観点から、市内のスポーツを取り巻く現状と課題を分析しました。

（アンケート及び調査の内容等については資料編（P.67～）をご覧ください。）

(1) スポーツを「する」

●市民のスポーツに対する取り組み

アンケートによると、健康であると答えた市民は８割、体力に自信があると答えた市民は５割を超えていますが、週１回のスポーツ実施率は37.7%と全国平均の45.3%（平成21年度）に比べ低く、約８割の市民が運動不足を感じていると回答しており、特に30代～40代の働き盛り世代で運動不足を感じている人が多い傾向がみられます。

一方で、高齢者のスポーツ実施率は高く、高齢者の施設利用の増加、スポーツ教室の参加者が増加している傾向がみられます。

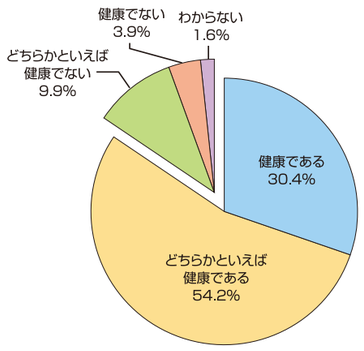
過去１年間に行った運動・スポーツは、ウォーキング、体操、ランニング（ジョギング）など、身近な場所で個人でも気軽に行える種目の実施が高い傾向がみられます。これら実施率の高いスポーツ種目は、今後の実施意向も同様に高くなっています。

今後は、子どもから高齢者まで、それぞれのライフステージに応じた様々なスポーツや体力づくり、健康づくりに取り組むことができるように、スポーツを身近に親しむことができる機会の充実に努める必要があります。

課題を踏まえた今後の取組

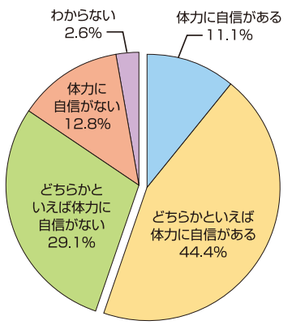
- ●子どもから高齢者までライフステージに応じたスポーツの推進
- ●気軽に、手軽に行えるスポーツの普及
- ●スポーツを始めるきっかけと身近に親しむ機会の創出

図1　健康についてどう感じているか



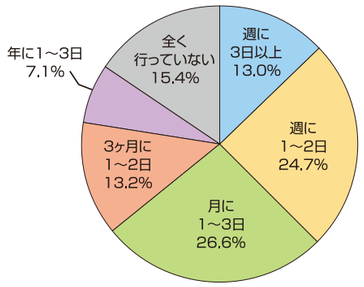
回答者数＝1,167人

図2　体力に自信があるか



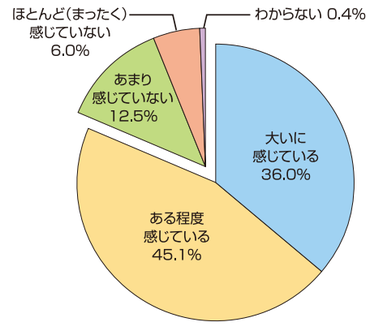
回答者数＝1,170人

図3　スポーツの実施頻度



回答者数＝1,168人

図4　普段、運動不足を感じているか



回答者数＝1,168人

図5　年代別運動不足の割合

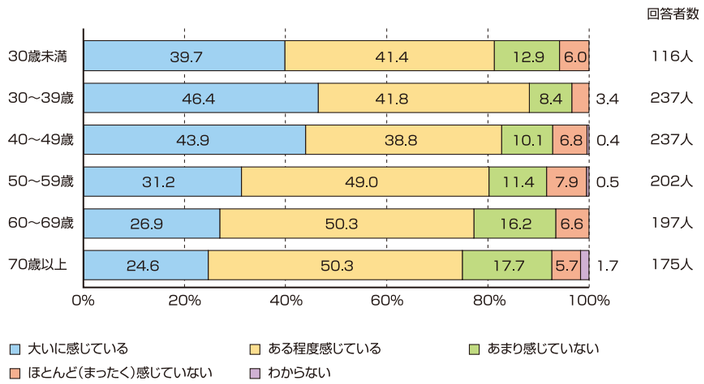
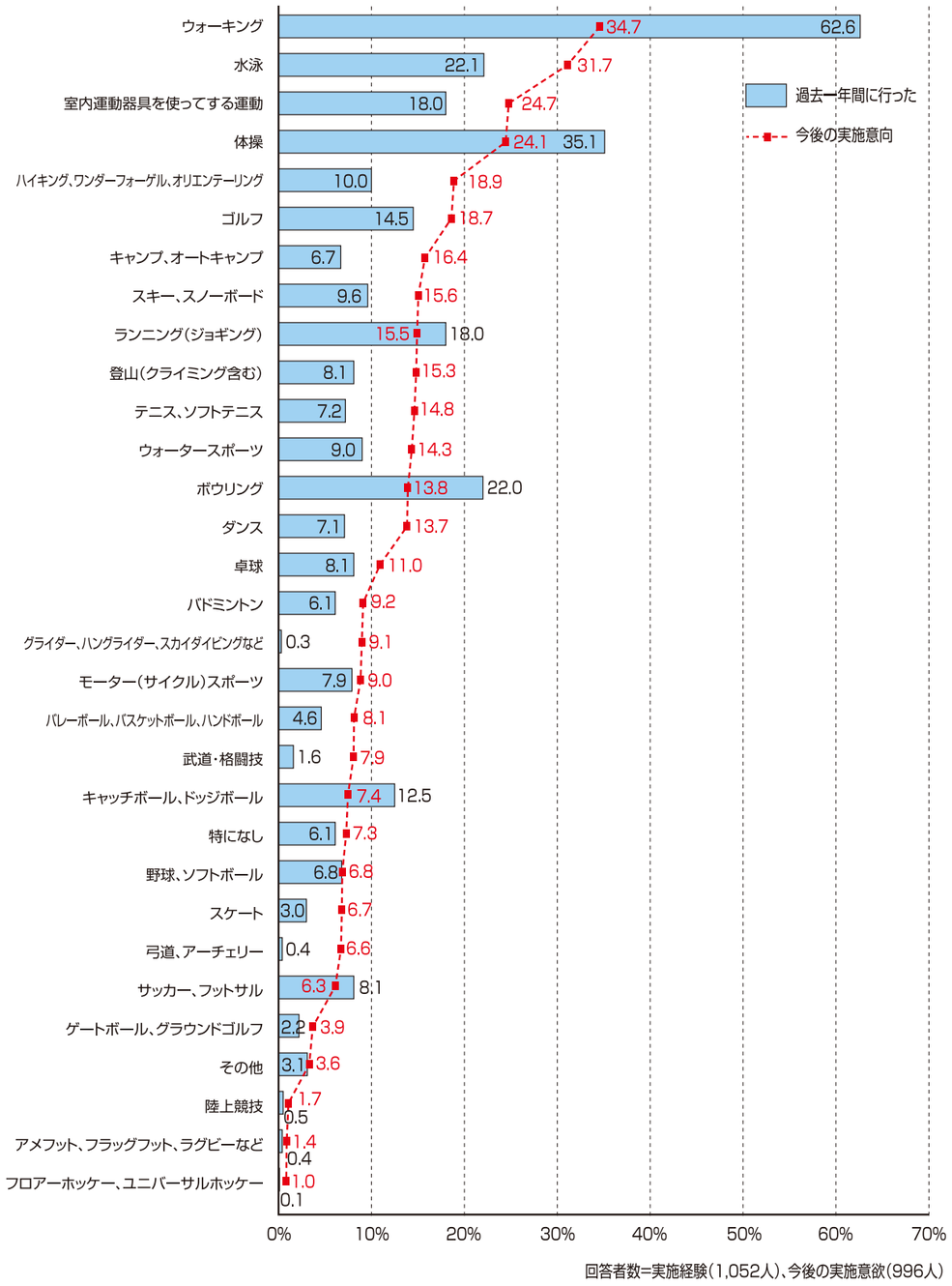


図6　一年間に行った／今後行ってみたい運動・スポーツ



回答者数=実施経験（1,052人）、今後の実施意欲（996人）

●総合型地域スポーツクラブ

総合型地域スポーツクラブ（総合型クラブ）は、同じ地域の住民が会員となり、それぞれが役割を担いながら、会費制によって自主運営されるクラブです。

総合型クラブでは、様々な人たちが、いろいろな活動をその興味やレベルに応じて各自のスタイルで楽しむことができ、スポーツだけでなく社会・文化活動、地域課題の解決への貢献などを行い、地域コミュニティの核となるクラブが理想とされています。

アンケートによると、総合型クラブのことを全く知らない市民が約７割で、特に若年層ほど知らない傾向が高くなります。一方で、総合型クラブとはどのようなものかを説明を受けた上で、総合型クラブに加入したいと思っている市民は４割以上いるなど、潜在的なニーズが見受けられます。

今後は、総合型クラブの周知が行われ、その活動が充実するに従って、加入希望者が増加することが予想されます。このため、スポーツを行う機会の充実を図るためにも、総合型地域スポーツクラブ育成連絡協議会、各クラブ、区役所等が連携を図りながら、クラブ活動の拡大や認知度の向上に向けた取り組みを行っていく必要があります。

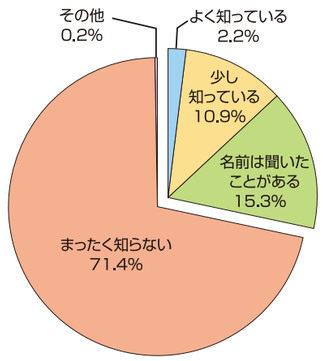
課題を踏まえた今後の取組

- ●総合型地域スポーツクラブの充実、活動支援
- ●スポーツを通じた地域づくり

総合型地域スポーツクラブ育成連絡協議会

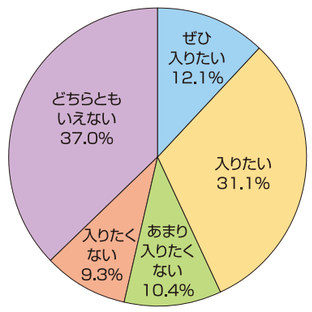
学識経験者、各種関係団体などにより構成される協議会で、川崎市において総合型クラブの育成に向けた調査･研究、新規クラブの設立支援などを行っています。

図7　総合型クラブの認知度



回答者数=1,154人

図8　総合型クラブへの加入意欲



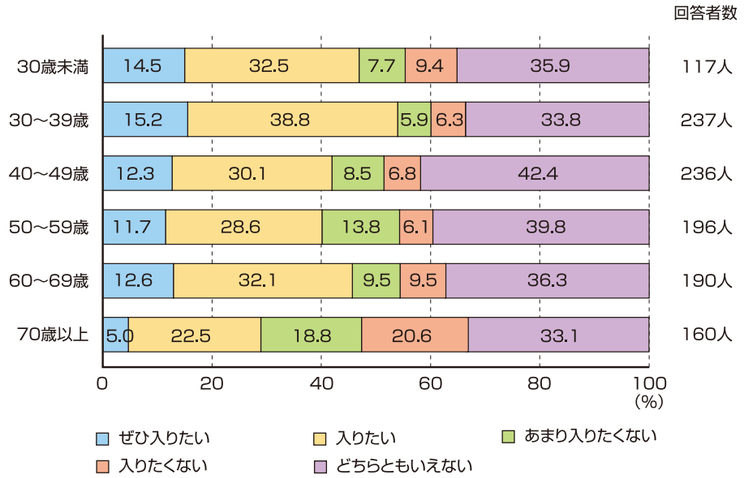
回答者数=1,140人

表4　川崎市内の総合型地域スポーツクラブの現況等

団体名	地区	設立年	主な活動	活動拠点
川中島総合型 スポーツクラブ	川崎区	平成 24年	陸上競技、カローリング、ヨサコイソーランダンス、ボール遊び等	川中島中学校 川中島小学校 藤崎小学校
幸総合型スポーツクラブ PLUM	幸　区	平成 21年	グラウンドゴルフ、ピラティス、ダンス、少年野球、ドッジボール、バレーボール等	幸スポーツセンター 石川記念武道館 西御幸小学校
平間スポーツ レクリエーションクラブ	中原区	平成 14年	卓球、ヨガ、ソフトテニス等	平間小学校 旧平間幼稚園
川崎市広域型地域スポーツクラブ かわさきスポーツドリーマーズ (K.S.D)	中原区	平成 23年	陸上、バレーボール、硬式テニス、体操、水泳、ミニバスケ等	等々力緑地スポーツ施設 中原区内学校施設
高津総合型地域 スポーツクラブ SELF	高津区	平成 18年	卓球、少年野球、少女バレー、サッカー、バスケットボール、フラッグフットボール、バドミントン、ヨガ等	高津中学校
菅生スポーツ コミュニティークラブ	宮前区	平成 24年	キッドビクス、フットサル、スポーツチャンバラ、フラッグフットボール、ゲートボール、体操教室等	菅生小学校 稗原小学校
中野島総合型 スポーツクラブ　ビルネ	多摩区	平成 20年	フロアボール、太極拳、バドミントン、フリンゴ等	中野島中学校 中野島小学校 下布田小学校
金程中学校区 わ･わ･わ･クラブ	麻生区	平成 18年	バドミントン、卓球、バスケットボール、走り方教室等	金程中学校 金程小学校 千代ヶ丘小学校

このほかに、中原元気クラブ（中原区）が設立に向けて準備中です。（平成24年9月現在）

図9　年代別クラブへの加入意欲



●子どもの体力低下

文部科学省の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、青少年の体力や運動能力は昭和60年頃から長期的な低下傾向がみられます。

平成22・23年度に実施された体力テストの結果によると、本市の子どもの体力は全国平均を下回っており、さらに「運動習慣、体力の二極化」がみられ、運動をほとんどしない児童・生徒が多いという点が指摘されています。

そこで、小学校では、平成23年度からの新学習指導要領の全面実施に伴い、１年生から４年生までの体育の時間数が増加されました。また、中学校においても保健体育科の授業時数が増加されるなど学校体育の充実が図られています。

また、体育の授業や部活動だけではなく、学校の教育活動全体で子どもたちが運動やスポーツに親しむ習慣を身につけ、体力の向上につなげるため、「小学校キラキラタイム」として休み時間や放課後にスポーツや外遊びをする取組が進められています。

また、団体調査・施設調査によると、幼児を含めた子ども向けのスポーツ教室や親子で参加できる教室の開催など、子どもがスポーツを楽しめる機会に力をいれているところが多くみられます。

今後は、子どもたちの体力の向上を図るため、引き続き学校体育の充実を図るとともに、学校以外の場においても子どもたちが主体的に運動やスポーツに親しみ楽しめるように、学校・家庭・地域・その他関係団体が一体となって、運動・スポーツに接する場や機会を充実する必要があります。

課題を踏まえた今後の取組

- ●学校におけるスポーツ機会の充実
- ●学校以外の場においても子どもがスポーツを楽しめる機会の創出
- ●市内の関係団体の連携による子どもへのアプローチ

表5　体力テスト結果（小学校5年生・中学校2年生平均値）

【小学校5年生】

種　　目	男　子		女　子	
	H23 川崎市	H23 全国	H23 川崎市	H23 全国
握力（kg）	16.86	17.19	16.33	16.98
上体起こし（回）	18.83	19.99	16.66	18.41
長座体前屈（cm）	**34.28**	33.00	**38.21**	36.93
反復横とび（点）	39.16	42.68	35.98	40.15
20m シャトルラン（回）	46.35	53.48	31.29	41.36
50m走（秒）	**9.22**	9.24	9.58	9.52
立ち幅跳び（cm）	153.01	155.79	141.09	146.34
ソフトボール投げ（m）	23.20	25.97	13.54	15.00

【中学校2年生】

種　　目	男　子		女　子	
	H23 川崎市	H23 全国	H23 川崎市	H23 全国
握力（kg）	28.05	31.04	23.20	24.47
上体起こし（回）	24.62	27.41	20.96	22.78
長座体前屈（cm）	40.25	43.53	43.58	45.04
反復横とび（点）	47.30	52.90	42.32	46.24
20m シャトルラン（回）	85.55	89.44	57.37	60.02
50m走（秒）	8.18	7.88	9.04	8.81
立ち幅跳び（cm）	185.53	198.26	160.13	170.12
ハンドボール投げ（m）	19.60	21.93	12.35	13.89
持久走（秒）	390.07	374.75	293.52	279.39

※ **太字** の種目は全国平均よりも川崎市の平均が高い種目　　（平成23年度児童生徒新体力テスト調査報告書）

(2) スポーツを「観る」

トップアスリートのプレーを間近に観ることは、市民が感動と興奮を感じ、スポーツを始めるきっかけづくりに繋がります。

市内には、とどろきアリーナや等々力陸上競技場など国際大会や大規模スポーツイベントの会場として利用される施設があります。等々力陸上競技場では、サッカーＪリーグで活躍する川崎フロンターレのホームスタジアムであるとともに、過去に「第３回アメリカンフットボールワールドカップ2007川崎大会」、「スーパー陸上競技大会」、国際陸上競技大会「ゴールデングランプリ川崎」など、大規模な大会が開催され、とどろきアリーナでは「2011ＦＩＧトランポリンワールドカップシリーズ川崎大会」が開催されています。

また、本市ではホームタウンスポーツ推進パートナーや関係機関、競技団体と連携し、ホームゲームなどの市民招待やフェスティバルの開催、大会でのエキシビション実施など観戦の機会を提供しており、国内トップレベルの試合から国際的スポーツイベントまで身近に観戦することが可能となっています。

アンケートによると、スポーツを観ることが好きな市民は８割、機会があれば観戦したいと思っている市民は７割を超えており、観戦の意向が高いと言えます。

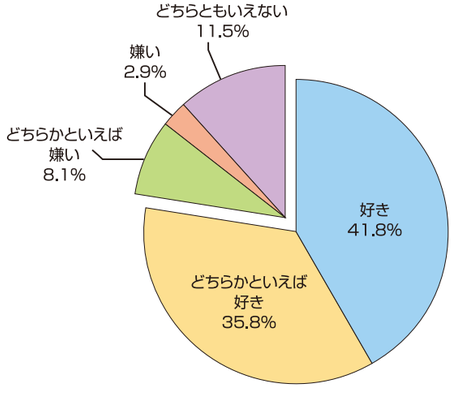
また、スポーツを観たい（観戦する）ときに情報を入手する手段として、テレビが６割、インターネット、新聞が約４割となっているものの、年代別にみると40代以下ではインターネットが６割を超えており、世代によって違いがみられます。

今後も、大規模大会の誘致や、市内のホームタウンスポーツを活かしたイベントの開催、ホームページなど様々な媒体による広報活動を通じて、スポーツ観戦の迫力・醍醐味を楽しむ機会を提供することが求められます。

課題を踏まえた今後の取組

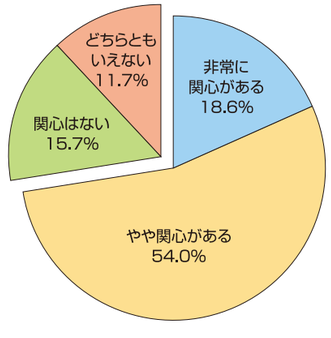
- ●スポーツ観戦の普及･推進
- ●大規模大会の誘致･開催
- ●スポーツに関する情報提供の充実

図10　スポーツを観るのが好きか



回答者数=1,178人

図11　機会があればスポーツを観戦したい



回答者数=1,131人

(3) スポーツを「支える」

●市のスポーツ環境

本市では、等々力陸上競技場やとどろきアリーナのほか、多摩川河川敷を中心として市内各地に運動場・多目的広場などを整備するとともに、屋内スポーツの拠点となるスポーツセンター等を各区に設置し、市民のスポーツ機会の拡充を図ってきました。

スポーツセンターや多目的広場では様々なスポーツが市民により行われており、各種競技種目を行うための専門用具や設備を備えた施設であるサッカー場、野球場、テニスコート、武道館などでは練習の成果を発揮すべく市民大会や競技大会などが開催されています。

また、川崎市における屋内・屋外スポーツのシンボル的存在であるとどろきアリーナや等々力陸上競技場では、プロチーム・実業団チームの試合をはじめ国際大会や全国大会などの大規模スポーツイベントが開催されており、本市にはその規模や特性に応じて様々な役割・機能を有するスポーツ施設が設置されています。

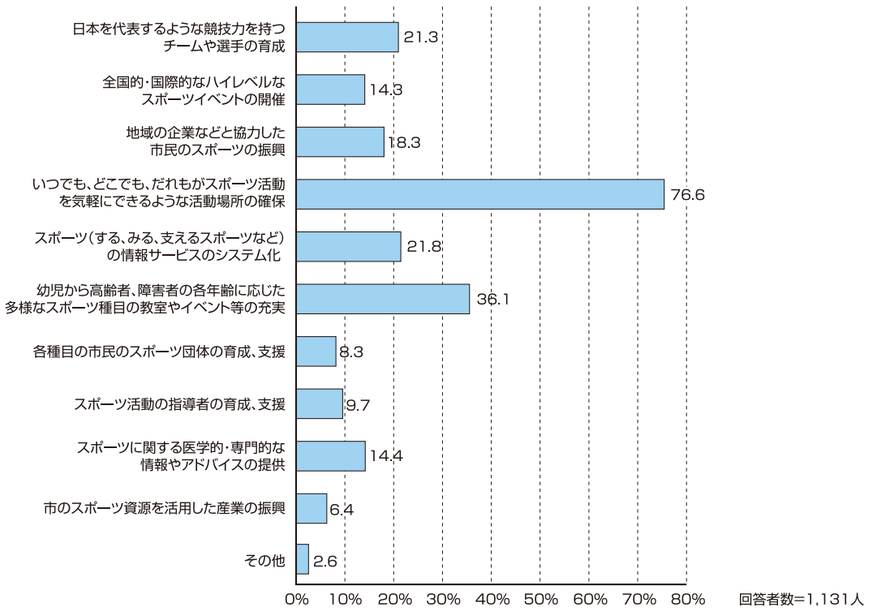
アンケートによると、重要だと思うスポーツ施策として、８割近くの市民が「いつでも、どこでも、だれもがスポーツ活動を気軽に出来るような活動場所の確保」を挙げており、スポーツ環境に対する市民のニーズは依然として高いものがあります。

川崎市は他の大都市に比べ面積が狭く、既に市街化が進んでいるという現状があることから、市民のスポーツ活動場所を充実させる方策を多様な観点から検討していく必要があります。

課題を踏まえた今後の取組

- ●スポーツ施設の充実
- ●スポーツ施設の機能向上

図12　重要だと思うスポーツ振興施策



●指導者・ボランティア

スポーツをするにあたり、「技術力や競技力を向上させる」ためにはもちろんのこと、スポーツの「楽しさを知る」ためや、スポーツを通じて「他人とコミュニケーションをとる」など、様々な目的を達成させるためには、適切な助言とサポートのできる指導者の存在が大変重要なものとなります。

また、クラブ・団体の運営スタッフなど様々なサポートが無くては教室や試合・大会などを開催することは難しく、スポーツを「支える」存在は必要不可欠なものです。

スポーツ団体や総合型クラブでは現在、指導者の不足や高齢化等の意見が多くあり、指導者確保やスタッフの人出不足による負担増に苦慮しています。

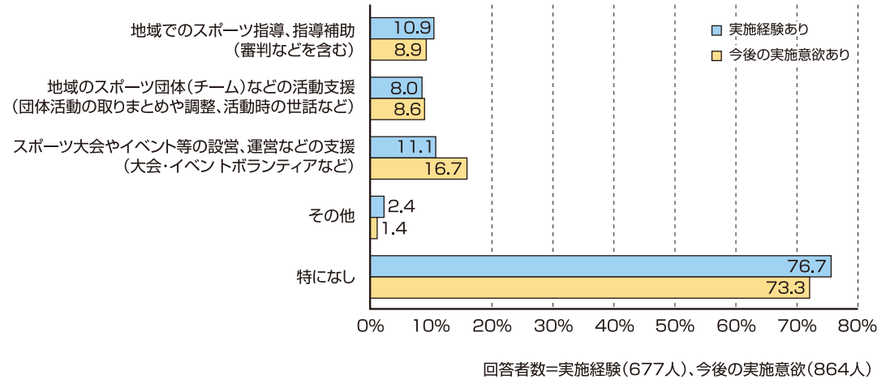
ボランティアについては、川崎フロンターレの試合や市民スポーツ大会（川崎国際多摩川マラソンや多摩川リバーサイド駅伝等）などでのスタッフ活動やスポーツ施設における保育や清掃・環境整備等で市民ボランティアが活動しています。ただ、アンケート結果によると市民のスポーツボランティアへの参加実績、今後の参加意向はともに約２割となっており、団体・クラブのニーズと市民の意識に差が見られます。

今後は、各団体と連携を図り、スポーツ指導者をはじめスタッフ希望者の登録制度を拡充させるなど、人材の確保や指導者育成のための支援を行うとともに、指導者やスポーツボランティアの活動の幅を広げるために、市民が様々な形でスポーツへの関わりを持つことができるよう、情報発信や活動機会の拡充など支援を行っていく必要があります。

課題を踏まえた今後の取組

- ●スポーツを支える人材の育成（指導者・ボランティアなど）
- ●団体との連携・支援

図13　行ったことがある、または今後行ってみたいスポーツ・ボランティア活動



回答者数=実施経験（677人）、今後の実施意欲（864人）

(4) スポーツを活用したまちづくり

本市では、スポーツの持つ様々な効果に着目し、スポーツを通じた「子どもの健全育成」や「地域の活性化」、「川崎市の魅力づくり」など様々な施策に取り組んでいます。

これらの代表的な施策として、本市のスポーツの特色の一つである「川崎市ホームタウンスポーツ推進パートナー」をはじめ市内を活動拠点としているチーム・アスリートと連携し、スポーツ教室の講師やイベントへのゲスト参加など、市民とのふれあいを大切にした地域密着型活動に積極的に取り組んでいます。

川崎フロンターレとは、選手による子ども達への絵本読み聞かせ会や学校授業の補助教材など、スポーツ以外の多岐にわたる分野においても協力関係を築いています。

また、日本アメリカンフットボール協会と包括協定を締結し、川崎市をアメリカンフットボールの一大拠点とするとともに、競技団体・地域・市民とともに、地域の活性化や青少年の健全育成などの面からまちづくりを推進しています。

その他、アスリートと連携したまちづくり以外にも、他都市との交流事業や国際規模、大規模なスポーツイベントの誘致・開催を通じて、「スポーツのまち・かわさき」を市内外にアピールする取組も行っています。

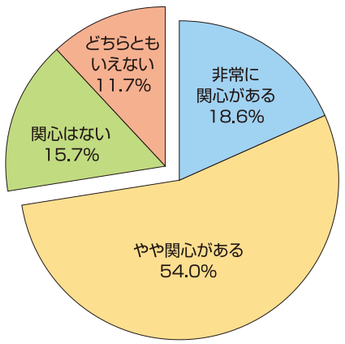
アンケートによると、川崎市の選手・団体が国内外で活躍することに約７割の市民が関心を持っており、約２割の市民が応援している地元チームがあると回答しており、市民のスポーツチームに対する関心の高さがうかがえます。

今後は、市内の各競技団体・協会と協力しながらスポーツを推進するとともに、スポーツ以外の分野においても、市内チームの活動実績や地域貢献意識の高さ、選手の知名度等を活かしながら、広範な分野でまちづくり・地域づくりに向けて連携していくことが求められます。

課題を踏まえた今後の取組

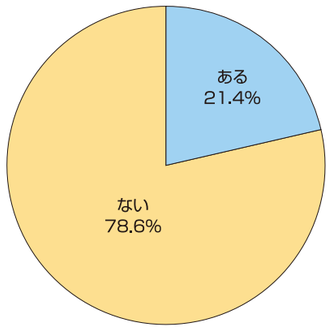
- ●市内のチーム･アスリートとの連携
- ●スポーツを通じた地域づくり
- ●スポーツチームに対する市民の関心の高さを活用した取り組み

図14　川崎市の選手や団体の活動への関心



回答者数=1,150人

図15　応援している地元チーム・選手



回答者数=1,105　人

川崎市ホームタウンスポーツ推進パートナー

本市では、競技スポーツにおけるトップチームやトップアスリートが行う「川崎への愛着や誇り、連帯感を育むことなど、地域住民と一体となりまちづくりに寄与するスポーツ活動」を「ホームタウンスポーツ」と呼んでいます。

このホームタウンスポーツを推進するため、「川崎市ホームタウンスポーツ推進パートナー制度」を創設し、スポーツを活用したまちづくりに取り組んでいます。

※平成24年9月現在

名称	種目／所属リーグ等
NECレッドロケッツ	女子バレーボール／Vリーグ
川崎フロンターレ	サッカー／Jリーグ
東芝ブレイブアレウス	野球／(財)日本野球連盟
東芝ブレイブサンダース	男子バスケットボール／JBL
富士通フロンティアーズ	アメリカンフットボール／Xリーグ
富士通レッドウェーブ	女子バスケットボール／WJBL
中田　大輔	トランポリン

ホームタウンスポーツ推進パートナー制度は、平成16年に創設され、3年毎に更新されています。